

岐阜県可児市立南帷子小学校

問い合わせ先：電話番号

0574-65-4181

I 学校の概要

1 児童生徒数、学級数、教職員数

児童生徒数	471名
学級数	18学級（内特別支援学級2）
教職員数	25名（含 校長・教頭）

2 地域の概況

昭和55年4月、帷子小学校から分離開校した創立27年目の学校である。岐阜県と愛知県の県境に位置し、4つの大型団地を校区とし、名古屋経済圏に隣接していることもあって活気のある都会的な雰囲気のある学校である。

地域・保護者の学校教育への関心は高く、学力や心の教育など今日的な教育課題が要望として出されることも多い。また、地域の人々によるボランティア「みなかたサポーター」の活動が広がりをみせ、登下校時の見守りをはじめ、様々な協力が得られている。

挨拶がよくでき、落ち着いた生活を送ることができる児童が多い。地域性から自然体験が豊かな児童は少なく、動植物の飼育や栽培、環境調査、保全活動等に取り組む機会を意図的に設定することを大切にしている。

長年にわたり、学校のグラウンドに隣接する雑木林の小山「わんぱく山」を題材として、その活用と保全の取り組みを行ってきた。これまでに、全国小中学校環境教育賞や学校関係緑化コンクールでの入賞、愛鳥モデル校の指定を受けるなど環境教育を推進してきた。また、牛乳パックのリサイクル活動や雨水の再利用等で「ぎふ学校版環境ISO」の認定証を受け、現在でもその取組を継続している。



平成18年度には、5年生が「わんぱく山」を総合的な学習の時間の中心題材として取り上げ、その歴史を調べて発表したり、児童が進んで土のう積みをして環境保全活動を展開したりした。その成果を全校へ発信したのはもちろんのこと、可児市環境フェスタでも市民に対して保全活動の大切さをPRした。その他、「わんぱく山」での活動としては、1・2年生が生活科で学習したり、4年生が理科で四季の植物の成長や変化について学習したりした。また、全校での土のう積み、「わんぱく山」発表会、「わんぱく山」オリエンテーリングなどを通して、身近にある小山の自然に興味をもち、自然に感謝する活動も推進してきた。

平成19年度には、グローブ校の指定を受けて、平成18年度の活動の継続以外に5年生が「気象観測」を継続的な活動として取り組み始め、4年生が「動物飼育」も総合的な学習の時間の題材として取り上げ、飼育活動を通して自然環境に関わる学習に取り組んでいる。

3 環境教育の全体計画等

長年にわたり、学校のグラウンドに隣接する雑木林の小山「わんぱく山」を題材として、その活用と保全の取り組みを行っている。



II 研究主題

「自然や社会から地球環境について学び、環境保全の活動に積極的に取り組む態度の育成」～地域の人・もの・自然から学ぶ「関わり・結びつき・つながり」～

地域の自然や社会に目を向け、自然環境の大切さについて学んでいく活動を通して、児童たちに、学校や地域の環境からはじまり、地球規模の環境まで視野を広げて環境保全の活動に興味をもったり、参加したりする意欲や態度を養う。

＜研究主題の設定理由＞

丘陵地を開発した団地という地域であるがゆえに、田畑での耕作、生き物の世話、山野を駆け回るような体験を豊富にしている児童は少ない。そのため、地球の自然はもちろんのこと、地域の自然についての知識や関心はとて少ない。そこで、地域の自然や施設等についての学習から始め、身近な環境学習を進めていきたい。その児童たちが、「人・もの・自然」と触れ合い、その中から課題を見つけ、自分たちで取り組み、解決していく営みをしていくことは、人間形成の上で重要なことである。学年発達に応じて、自然体験や調査活動、生き物の世話、環境保全活動に従事している人々との交流、等々を行うことにより、豊かな感性を磨き、自然や社会から積極的に学んだり、働きかけをしったりする態度を養っていきたい。そして、徐々に視野を広げていき、最終的には地球環境の規模で、興味・関心を持ち、知識を広げ、環境保全の活動に興味をもったり、参加したりする態度を養いたいと考えた。その態度こそが、将来地球の環境を守っていく姿勢につながると考え、この研究主題を設定した。

III 研究の概要

1 研究のねらい

研究主題「自然や社会から地球環境について学び、環境保全の活動に積極的に取り組む態度の育成」の実現に向けて、本校での環境教育のねらいを「仲間・地域・環境・人々・世界との関わりや結びつきやつながりを学び、自分たちの目標をもち、課題を解決する方法を考え、自分たちができることを積極的に実践していこうとする力を育成する」とし、全体計画に沿って取り組んでいく。グローブ推進事業の観測や調査、観察活動は、課題解決のための手立ての一部であると考えている。児童が、自然の事物や現象に対してもった見方や考え方をより科学的にしていくことを大切にすると共に、地球環境をいろいろな視点から学び、環境保全のために自分たちが取り組めることを実践し、地域に発信していこうとする態度を育成していく。身近な事物や現象を教科や総合的な学習の時間の調べ学習の中で、より広い視野で考えて取り組んでいくことができるようにしていきたい。

2 校内の研究推進体制

生活科では、自然を活用した学習、理科では、生物や気象の学習、総合的な学習の時間では、身近な自然環境を調べる活動を通して、環境保全に目を向けさせてきた。児童委員会活動では、アルミ缶収集など身近にできる福祉・エコ活動への取り組みを進めてきた。

(1) 授業

①教科指導

学習指導部を中心に、各教科の指導内容を検討し、環境にかかわる教材を意図的・計画的に指導する。また、地域の人材を積極的に活用し、環境保全活動に従事している人々からも学ぶようにしていく。

②道徳指導

内容項目3の「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」を意識して指導し、次のような心を育てる。

- ・自然の素晴らしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする。
- ・生命の尊さを感じ取り生命あるものを大切にする。
- ・美しいものや気高いものに感動する。

③特別活動

生活指導部を中心に、特別活動の指導内容を検討し、環境にかかわる題材を意図的・計画的に指導する。

④総合的な学習の時間

学習指導部、研究推進委員会を中心に、各学年の活動内容を検討し、環境にかかわる内容を意図的・計画的に指導する。また、各学年で環境にかかわる情報発信を心がけていく。

(2) 児童会活動・子ども会活動

生活指導部、児童会担当を中心に活動を展開し、アルミ缶回収の活動などのリサイクル、リデュース・リユースについての関心や知識を培う。また、地域の子ども会育成会との連携を図る。

(3) 観測・測定・観察

教頭、教務主任を中心に全校での指導体制を確立してきている。観測・測定・観察は、主として4・5年生が行う。

(4) 外部人材の活用

地域の専門家をはじめ、県や市の博物館等の専門家の指導を受けながら研究を進めていく。

3 研究内容

(1) グローブの教育課程への位置付け

- ① 1年生：生活科や図工（自然物を活用した遊び等）
- ② 2年生：生活科（地域の自然探検、自然物の活用）
- ③ 3年生：社会科（地域の土地の活用探検）
- ④ 4年生：理科、総合的な学習の時間、特別活動（樹木の観察記録・情報処理・生物飼育）
- ⑤ 5年生：理科、総合的な学習の時間、特別活動（天気の変化、雲の観測、「わんぱく山」保全）
- ⑥ 6年生：理科、総合的な学習の時間、特別活動（地球の温暖化、国際理解教育、環境を守るための活動）

⑦全学年：道徳指導

（自然愛、動物愛護、生命の尊重、敬けん）

⑧その他

（登校後や休み時間等を活用してエコ・福祉活動を推進）

(2) グローブを活用した教育実践

①自然物の活用



1年生生活科や工では、「わんぱく山」の自然物を使って、遊びを工夫したり、造形物を作ったりした。生活科ではワークショップを開いた。小物づくりやゲームづくりのコーナーでは、自然物の活用の仕方を地域や保護者の方々に説明し、作り方を教え、楽しんでもらうことにも取り組んだ。



②地域探検

2年生は生活科で、3年生は社会科の学習で地域の探検をし、地域の自然にも目を向ける学習活動をしている。また、調べたことをまとめ、



伝えてく活動も行い、児童の表現力を育成している。

③樹木観察

4年理科「あたたかさ生き物」では、樹木の先生であり、本校の元校長先生の木村克先生に来ていただき、木の特徴や種類を教えていただき、樹木への興味関心を広げることができた。



「わんぱく山」にある樹木の継続的な観察をし、デジタルカメラやパソコンを活用し、自分の木の図鑑づくりに取り組んだ。



また、環境カウンセラーの坂巻豊先生に来ていただき、「わんぱく山」の生き物やビオトープについてお話も聞き、自分たちの身の回りの環境に目を向け、継続的に観察したり、取り組んだりしていくことの大切さを学ぶことができた。

（児童の手紙への講師の方の返事）

みなさん、こんにちは。今日、みなさんが、書いてくれた作文が届きました。全員の作文を一気に読みました。この作文を読んでいると、みなさんの「ふだんの学習ぶり」が目に見えてくるようです・・・
・作文の中の「いろんなことをもっと知りたい」「もっと分かるようになりたい」「もっと調べたい」などの言葉が光っています。その気持ちが大切です。いつもその気持ちを忘れずに取り組めば、必ず学んだことが力となって身に付き、心も体もどんどん育っていくものと思います。・・・

☆以下、児童の更なる質問に答えた返事

・葉脈を見ると木の種類が分かるの？

一度いろいろな葉を集めてていねいに写生してみてください。版画のように葉にきれいな色をぬって写し取ってもいい。そして、比べ合えば、葉脈の特徴やスタイルが分かってきます。1本1本のすじが平行になっているもの、網目になっているもの、エノキやムクノキなどのように3本のすじがはっきりみえるものなどがあります。特徴が分かれば、木の名前も分かるようになります。

☆この他にも多くの質問の応えていただくお返事をいただき、子どもたちの質問に答えていただいた。

④生物飼育

4年飼育活動では、生き物（ヤギ・ウサギ・カモ・小鳥）を飼育するために、獣医さんの話を聞き飼育のポイントを学んだ。また、継続的に飼育する中で気温の変化により動物たちの様子が少し変化することやウサギの生死にも出会い、命の大切さを学んだ。

⑤大気観測

5年理科「天気の変化」で学んだことを生かして、雲の観測を継続的に行い、天気予報や温暖化についての関心を深めてきた。雲の観測は、5年生で立候補したグローブ委員が交替で行っている。グローブ委員を募集したところ、38名が立候補し、毎日当番を交替しながら行っている。雲の観測について、岐阜地方気象台の方に話を聞き、天気の変化と雲の関係についても理解を深めることができた。グローブ活動での観測項目は、雲の観測だけである。観測では、デジカメを活用し、雲の写真の記録も行っている。データのエントリーは今のところ教員が行っている。英語画面への抵抗があるようである。



（児童の感想）雲の観測は、毎日午後一時に行っています。雲の観測で難しいのは、雲の種類を見分けていくことです。当番のみんなで意見を出し合ったり、雲の写真を見たりして決めていきます。

（児童の感想）岐阜地方気象台の方々に、天気の変化の様子や雲の種類の見分け方、雨量計の仕組みについて話を聞きました。運動場では、実際の雲を見て、判断することも学びました。今まで分からなかったことが少し解決できてよかったです。



⑥環境保全

5年総合的な学習の時間では、「わんぱく山」の歴史を調べたり、環境を守っていく活動を工夫してきた。28年前の開校当時は、子どもたちが遊び場として自由に入ることができ、山遊びを通して、体力作りもしていたことを知り、自分たちももっと活動できるわんぱく山にしたいという願いをもった。しかし、山の表土が流失し、樹木の根が洗い出されて問題がいろいろあり、遊び場として自由に入ることができなくなってしまった。少しずつ土のう積みをして、山土の流失を減らし、山を保全する努力を続けている。

全校のみんなが山に入れるよう、土のう積み以外にも斜面などの危険箇所の表示やスズメバチの捕獲や対処方法を地域の方に教えていただき、捕獲装置づくりにも取りくんだ。



私たちは、「わんぱく山」の保全活動として、土のう積みを行っています。全校で協力して麻袋に土をつめて運んでいます。



「わんぱく山」には急な斜面があり、危険なところもあります。ロープをとりつけて安全に気を付けて活動できるようにしています。

可児市環境フェスタでは、「わんぱく山」の取組について、可児市ゆとりピアで発表した。当日の発表は、可児市教育委員の大久保さんや教育長さん、帷子公民館長の奥山さんにもほめていただき、子どもたちの自信につながった。





可児市環境フェスタでの発表の後に、愛・地球博のマスコットのモリゾウ・キッコロとの記念撮影

「わんぱく山」保全に向けての次のステップは、ドングリの苗木づくりに取り組み、「わんぱく山」の山土流失を減らすことである。

NPO法人「どんぐりモンゴリ」の角和保明さんに来ていただき、ドングリの実から苗木を育てる活動に取り組んでいる。

ドングリの実を植えて、苗木作りに取り組んだ。



(児童の感想)
どんぐりモンゴリの角和さんに、ドングリを山に植えることは、海の生き物の餌となるプランクトンを増やすことになるという話を聞いた。
牛乳パックやペットボトルでドングリの苗木が作れるということで、教えてもらった。牛乳パックには、わんぱく山の土を入れた。苗木が大きくなったら、わんぱく山にも植えたいし、水源地にも植えたいので大切に世話をします。

⑦国際理解教育

6年総合的な学習の時間では、国際理解教育を進め、海外の環境を守る活動について調べることもできた。福祉委員会の活動とタイアップして、海外の環境教育を進めているオイスカ事務局と連携を図り、毎年オイスカ交流会を行っている。オイスカは民間の国際協力団体で、農業を中心とした人材育成、農村開発、植林プロジェクト、環境教育プログラム等を展開している。その取り組みの一つに「子どもの森」計画があり、ベ

ルマークを集めて苗木を送る活動に協力している。また、書き損じハガキや学用品を集めて途上国の子どもたちの教育環境の充実を図る支援も行った。



全校朝会で、福祉委員が、地球の環境問題を提示し、全校児童にベルマークや学用品の回収協力を呼びかけた。

6年生の国際理解教育「環境チーム」が調べた地球温暖化の影響についての資料と感想

ぼくが調べたのは、グリーンランドのことで。島の80%は雪や氷で覆われている。その氷が地球温暖化のせいで溶け始めている。・・・ぼくは、今回調べたことを生かして電気をこまめに消す、マイバックを持つなどしっかりやっていきたい。



わたしは、ツバルという小さな島国を調べた。地球温暖化により、海水が陸地に入り込んで作物が育たなくなってしまうことが分かった。ツバル国民が、少しでも長く生活できるように福祉委員のやっている乳パック集めの活動に進んで協力したい。

オイスカ交流会



フィリピンでの植林活動への取り組み「子どもの森」についてのお話を聞いた。



福祉委員が呼びかけ、全校のみんなで集めた書き損じハガキや学用品を寄付した。

オイスカのみなさんへ

オイスカの活動のことを細かくていねいに教えてくださいましてありがとうございました。ぼくが、知らなかったことや分からなかったことの質問にもきちんと答えてくださったので、よく分かりました。

今までは、1日にどれだけの木が減っているのか、何年後には、どれだけの木が減ってしまうのかについて考えたことがなかったです。これから木を植える機会があったら木を植えていきたいし、木を大切にしたいと思いました。

また、ぼくたちが集めたベルマークが植林活動にも役立っていることが分かったので、ベルマーク集めにもしっかり取り組んでオイスカの活動に協力していきたいと思いました。

で考え、実践する力が育ってきた。

- ・6年生は、外国の様子を調べる活動に積極的に取り組み、オイスカ交流会では「子どもの森計画」への協力のために全校に呼びかけて集めてきた学用品や書き損じハガキ等を寄付することで社会貢献することができた。

③岐阜県版学習状況調査の結果から

- ・岐阜県版学習状況調査は、国語・社会・算数・理科の4教科で実施されている。理科については、例年概ね良好な結果を得ている。グローブ校の指定により、どのような変化があるか、その結果を分析していきたい。

(2)保護者による評価

保護者アンケートにより、児童の実態についての評価を把握することが可能である。平成19年11月のアンケートでは、児童の意欲面、教員の熱意の面で高評価を得ている。しかし、環境といった視点での評価項目はないので工夫をしていきたい。自由記述の文面からは、児童の「わんぱく山」に対する積極的なかわり方を評価するものが、多く記述されていた。

(3)外部評価

学校評議員会において、「わんぱく山」発表会をはじめとした環境にかかわる体験的な活動について、多くの賛辞を得ており、今後の活動の充実も期待されている。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1)児童の姿から（教職員による評価）

①児童の行動観察

- ・グローブの観測活動は当番を忘れる児童はなく、意欲的に取り組んでいる。
- ・「わんぱく山」再生に向けての取り組みに意欲をみせる5年生児童が育ってきた。全校への働きかけを計画するなど、素晴らしい自然を紹介しようと考え、行動している。

②理科や総合的な学習の時間の様子から

- ・4年生は、樹木の継続的な観察を通し、季節の変化との関係に気づき、インターネットを活用し、情報を収集したり、パソコンを活用して自分の木の図鑑づくりもする力が育成できた。また、生き物への愛着心を培うことができた。
- ・5年生は「わんぱく山」の取り組みに積極的な姿を見せ、主体的な態度が育ってきている。「わんぱく山」発表会の企画・運営や市の環境フェスタでの発表にも工夫がみられた。
- ・理科の学習においても自然を意欲的に探究する態度が育ってきた。
- ・危険な箇所への配慮について、スズメバチの捕獲や対処方法について地域の方から学び、自分たち

2 研究の課題

- ・観測項目を検討し、気温観測や生物の芽吹き観察にもエントリーさせたい。
- ・「わんぱく山」を中心とした環境学習を更に充実させたい。
- ・「わんぱく山」の環境保全について保護者に呼びかけ、保全活動を充実させたい。
- ・専門家を活用した授業の充実を図るとともに、環境についての取り組みを情報発信していく。

V 研究第2年次の活動計画

- ・気温観測や生物季節の調査を開始し、データエントリーをしていくこと。
- ・「わんぱく山」の活用について、3年生以下の学習を広げていくこと。
- ・環境保全活動を充実させるために、ドングリの収集活動を行い、苗木づくりを行い、水源地の森林づくりにも貢献していくこと。
- ・専門家を活用した授業の充実を図っていくこと。
- ・学校のホームページを充実させ、具体的な環境保全活動の取り組みの様子を情報発信していくこと。